



# なごや「聖歌」だより 2月号'10

## 「新聖堂」成聖式を終えて 「温かい祈り」

新聖堂の成聖式が無事終わりました。多くの方から「温かな成聖式だった」という感想をいただきました。また「一つになった祈り」「一致団結して奉仕する姿が素晴らしかった」というおことばもいただきました。建物だけ、聖歌だけ、イコンだけが突出して評価されるのではなく、礼拝全体、祝賀会を含めた成聖式式典全体をほめていただいたことは何よりと思います。

日本で、不朽体を入れる本格的な成聖式は十数年ぶりでしたが、ダニイル府主教座下、セラフィム主教座下が入念に準備されたおかげで、スムーズに宝座の成聖、聖堂の成聖が行われました。聖歌隊も順序に沿った楽譜を準備し改良を加え、週2回の練習を重ねました。神品とのコンビネーションもよどみなく祈りを進めることができました。

名古屋では、通常の主日、ほとんど全員が聖歌に参加しています。しかし300人近くのゲストを迎える大きな式典を行うとなると、さまざまな裏方が必要になり、役員は会議を重ね分担を考えました。日頃聖歌を歌っている多くの方にも交替でほかの役割の兼任をお願いすることになりました。中には熱心に聖歌練習に参加されたのに、あえて終日、会計や受付のご奉仕を引き受けた方もあります。また寒い中、看板を持って外に立つ道案内も大変だったと思います。しかし、ある外国の信徒の方は「地下鉄の駅を降りたときから、案内の方が立っていてくださり、心からの歓迎が感じられ最初から嬉しい気持ちでいっぱいになった」と感謝

の手紙をくださいました。

聖歌や誦経、堂役は直接に礼拝に関与しているので、特別な存在に思われますが、実は教会という体全体の働きのひとつの役割にすぎず、そのまわりに目立たないところで働く多くの方がいます。今回はその多くの信徒の無私の働きと祈りに支えられて、素晴らしい成聖式を行うことができました。

聖使徒パウエルがコリントの教会への手紙(1:12.12)で述べた、教会という体の部分部分である信徒がそれぞれに働き、互いに補い合う教会の姿があったと思います。



今回成聖式の祈祷書、楽譜を用意するにあたって内外の多くの方のお力を借りました。この場を借りてお礼申し上げます。

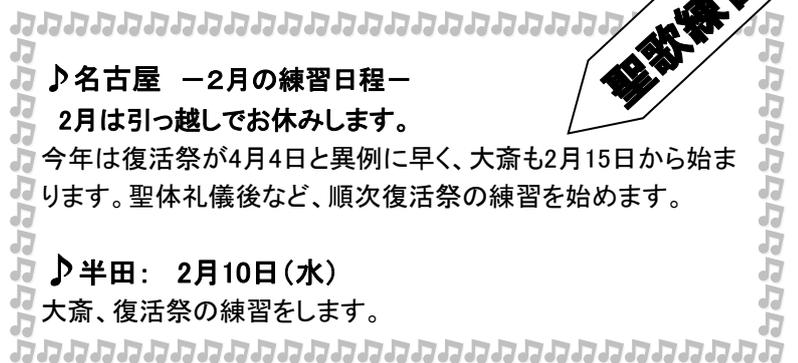


## ズナメニイ研究会 紹介

### 2月は引っ越しと大齋のためお休み

#### 2月の指揮当番

- 7日 ピーメン松島、エレナ広石 (結婚式)
- 14日 エレナ広石
- 21日 マリア松島



#### ♪名古屋 -2月の練習日程-

2月は引っ越しでお休みします。

今年は復活祭が4月4日と異例に早く、大齋も2月15日から始まります。聖体礼儀後など、順次復活祭の練習を始めます。

#### ♪半田: 2月10日(水)

大齋、復活祭の練習をします。

# 建物と聖歌－正教の伝統

正教会は「伝統」を大切にします。私たちの「聖なる伝統」とは、聖書、教義、聖師父のことばなどのほかに、礼拝にかかわる諸事、建物、イコン、聖歌なども含まれます。教会から教会へ、場所から場所へ、時代から時代へと受け渡されてきた教会生活全体が伝統です。

ところで、他宗派の教会では有名建築家の独創的なデザインをしばしば見かけますが、正教会では聖堂を建てる時、過去の伝統に目を向けることが多いようです。

私たちの新聖堂のデザインも、紆余曲折があったものの、最終的に四角い箱形、半円のヴォールト屋根の中世ロシアの古い形が選ばれました。ビザンティンから正教が伝わって4-500年たったころ、イコンではアンドレイ・ルブリョフなどが活躍し、聖歌もスラブ語の単音聖歌が発達したころ建てられた形です。中世の聖堂は石造りですが、現代日本の私たちは鉄筋コンクリート造です。

内部は暖かみのある木をベースに、響きのよい空間を模索しました。余談ですが、この聖堂は女声よりも男声がよく響くことがわかりました。当時は女性は聖歌を歌わなかったため、男声の低い声に適した構造なのかもしれません。シャンデリアは輪型のビザンティン・スタイルで、材料は木を用い、内装との調和を図りました。



成聖式の聖歌も伝統を取り入れました。成聖式前半の儀式は大半が至聖所内で行われ、聖所では聖詠が淡々と歌われます。今回は数人の選抜メンバーで歌いました。参加者全員で歌うのをモットーとしてきた名古屋教会とし

## ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

ては珍しいことです。日程に余裕がないため聖歌練習の負担を軽減するというのが実際的な理由でしたが、同時に礼拝の性格上、目立ちすぎず、流れを途絶えさせない聖歌が求められました。誦経者が読んでもかまわないのですが、読むより歌う方が動きが出ます。聖詠を同じメロディの繰り返しにのせて歌うのは修道院などでよく行われる手法で、今回は主に至聖三者修道院至聖三者聖堂で歌われているメロディを用いました。



我がかみ 我が王よ、我爾を尊み爾の名を世に あがめ讃めん

同様に主教の着装の歌も、全部を聖歌隊が歌うのは大変なので、ソロの歌手が美しく聖詠を歌い、聖歌隊はシンプルなりフレイン「爾の霊は・・・」を繰り返しました。ビザンティンの応答唱という手法です。名古屋では祭日のアンティフォンや領聖詞「天より主を讃め揚げよ」などにも応用してきました。当日も領聖前、少女たちが148聖詠を唱え、聖歌隊は領聖詞を繰り返しました。短いフレインなら初めての人でもすぐに加わります。

もうひとつの工夫は、聖体礼儀で最も大切な部分、聖変化「親しみの献げもの(平和の憐れみ)」をあえて単音にしたことです。指揮者も会衆の方を向いて指揮し、みなで声を合わせて歌いました。中世ロシアでも聖変化の歌は会衆参加で歌われていたそうです。

聖堂も聖歌も正教の豊富な伝統の中から、今の教会にふさわしいものを選び、私たちの寸法に合わせ、現代日本の素材でリフォームしました。聖堂と聖歌は一体となって生き活きた礼拝を実現します。礼拝は神と出会う場所です。そこに聖神が働き、伝統は生きたものとなります。



○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料